法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

〈図書紹介〉『言葉と文体 ： 修辞法の試み』佐藤信衛 著 竹内昭 編 梓出版社 二〇一一年

菅沢, 龍文 / SUGASAWA, Tatsubumi

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学
(巻 / Volume)
8
(開始ページ / Start Page)
69
(終了ページ / End Page)
69
(発行年 / Year)
2012-06
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008223

Hosei University Repository

【図書紹介】

『言葉と文体　修辞法の試み』

佐藤信衛　著　竹内昭　編　梓出版社　二〇一一年

菅沢　龍文

佐藤信衛は、『文學界』同人の河上徹太郎によれば、「哲学というものを一般批評家の用いる文體（ぶんたい）でこなして書ける」人であった。本書『言葉と文体』はその佐藤の博士論文（一九五四年申請）の参考論文であり、このたび、とりわけ法政大学名誉教授の竹内昭先生のご尽力で、単行本として世に問われることとなった。

そもそも佐藤は、考えと言葉とは別のものとして、「言葉は考えを表す一つの手段である」という立場をとる。とはいえ言葉は、「やがて考えそのものと結びついて手段以上のものとなる」とも述べる。そして、「考えの掟」について説く論理学は、「話や文の掟」に他ならず、考え方について言うべきことは、すべて論理学に尽きているとする。

それでは、本書における佐藤の意図は何かと言えば、それは国語（日本語）について次の二点を考えることにある。一つは、「考えを表す手段として国語をととのえるにはいかにすべきか」という問題である。これは論理学の「実行」にかかわる。もう一つは、「或る考えを解りやすく説き、また言葉によって人を動かすにはいかにすべきか」という問題である。これは「推理の簡略化」や「感情に訴える」ことなど、「言いかた・話しかたの工夫」にかかわる。これらは「論理学外の問題」となる。つまり、アリストテレスで言えば『オルガノン』外の『レトリカ』すなわち修辞法の問題である。だから本書は、佐藤の博士論文『考　巻一　新論理学』と『考　巻二　科学の方法と分類』の参考論文という位置づけになったと思われる。

佐藤は、戦後の口語化による国語の改新はうまくいったとしつつ、まだまだ欠点や不自由があるとする。これは翻訳文についても同じで、国語に訳語が見あたらないときには直ちに新語を作って当てるなどは、「思想を先ず移しておいて、それ〔思想〕が自ら言葉を探す」という佐藤の考えとは逆である。これでは「知識や思想はいっこう移って来てはいない」というもどかしさを佐藤は訴えている。

そこで佐藤は上記の二つの問題に答えるべく、第一章で「推理の文」、第二章で「説得の文」、第三章で「感情の文」について論じている。このような本書は、戦後ばかりか現代においても、自分の文章ひいては国語について、佐藤の鮮明な文章を味わいつつ考えさせてくれる好著だと言えよう。（注意――カギ括弧内はすべて本書からの引用であり、キッコー〔　〕内は菅沢の捕足である。）